



## 脱植民地化

——帝国・暴力・国民国家の世界史——

デイン・ケネディ 著 長田紀之 訳

東京 白水社 2023年 162+xvi p.

本書の原著はオックスフォード大学出版局の刊行する A Very Short Introduction シリーズの一冊として 2016 年に刊行された。著者 Dane Kennedy はアメリカの歴史家で、ケニアと南ローデシアの入植者社会に関する博士論文を 1987 年に刊行したのち、イギリス帝国史研究という関心のもとでこれまでに複数の単著を刊行している。そのなかにはリチャード・バートンやムンゴ・パークといった探検家を切り口としたアフリカに焦点を当てた著作も含まれる。著者のアフリカに関する豊富な知識と帝国史研究というパースペクティブが融合され、具体的な出来事と俯瞰的な視点の双方から脱植民地化という歴史的事象について語られるのが本書である。

本書の関心の中心は第二次大戦以降のアジア・アフリカでの脱植民地化であるが、著者はこれを歴史的にみられた脱植民地化の 4 つの波のひとつとして位置づける。第 1 の波はアメリカ合衆国独立を皮切りとする新世界での植民地独立の動き、第 2 はロシア革命や第一次世界大戦のなかでの帝国の終焉と新たな国民国家の誕生の動き、第 3 がアジア・アフリカでの第二次大戦後の動き、第 4 がソヴィエト連邦の崩壊にともなう新たな独立国家の誕生である。これらの複数の波を提示することにより、アジア・アフリカでの動きを広い歴史的文脈のなかに位置づけ、より深い洞察を得ようとするのが本書の狙いである。

第 1 章でこの複数の波というコンセプトが提示されたのち、第 2 章から第 4 章で、第二次大戦期から独立に至るアジア・アフリカでの脱植民地化過程が取り上げられる。植民地帝国の崩壊過程での暴力の問題、独立運動の担い手たちの多様な運動の方向性、独立時の国民国家モデルの採用、このモデルがもたらした勝利と悲劇の両面といった論点に沿って分析的に記述がなされている。終章の第 5 章では、新植民地主義、ポスト植民地、帝国の継続といった論点から脱植民地化をめぐる今日の問題が展望される。

脱植民地化は、本書でも展開されているとおり、帝国による支配や国家主権の問題と不可分であり、支配、抑圧、暴力、解放をめざす思想とも深く結びついたものである。それは今日の世界を作り上げた歴史的背景であると同時に、その影響が現在なお続いているという意味では現在進行中の現象でもある。さらに脱植民地化はアフリカの歴史と現在にとりわけ深く関わる事象でもある。本書は、脱植民地化のこのような多面的な性質についてバランスよく的確な知識を提供してくれる好著であり、アフリカ研究者にとっても読み応えのある一冊といえる。

佐藤 章（さとう・あきら／アジア経済研究所）

